タイにおける第三国研修
コミュニティーフォレストリーについて

大 角 泰 夫

はじめに

筆者は，昭和61年度JICA予算によって，林業部門で新たに始められた「第三国研修・コミュニティーフォレストリー」に特別講義，技術指導および評価担当短期専門家として参加した。この第三国研修はタイの王室林野局を開催機関として行われたものであるが，利点も多く今後の研修の優れた形の一つと考えられるので，読者の皆さんにこの研修について紹介し，今後の判断材料として提供することを試みたものである。したがって，この紹介文では研修課題についての具体的・技術的説明はできるだけ省略し，研修の内容，実施状況および評価を説明するにとどめる。もし読者の中で，今回のテーマであるタイのコミュニティーフォレストリーの実態について知りたいという方があれば，本誌の10号の竹田氏の報告を参照するか，筆者宛に連絡頂ければ幸いである。

外国人研修について

大学，林業試験場や育種場の皆さんならよくわかると思うが，日本はこんなにたくさんの研修生を受け入れているのかという実感をもっておられるに違いない。研修と招へいで来日する外国人は，林業試験場だけで毎年100人を下らない。このうち研修は経費負担機関の違い，研修の形態などの違いによっていろいろと異なる。ここでは例として林業試験場で行われているJICA研修について紹介する。

林業試験場で行われているJICA予算の研修には，集団研修と個別研修があり，前者は主にコロンボプランによる研修，後者は主として現在進行中のJICAプロジェクトを円滑に推進するためのカウンターパート研修である。

個別研修の研修生はプロジェクトにとって早急に解決しなければならない具体的な問題をテーマとして派遣されるので焦点が絞りやすく，研修生も受け入れ側も対応が比較的容易である。ところが，一般的な課題を行う集団研修については課題の内容によってはいろいろな問題がある。一般的課題であるために講義主体となり，多くの分野から何人もの講師が入れ替わりたち替わり登場する。講師の中には通訳を介在する

OHSUMI, Yasuo : The 3rd Country Training Programme (TCTP) "Community Forestry" Held in Thailand
農林水産省林業試験場土壌部

場合もある。また実際の研修の場が，大半の研修生が生活している熱帯と違っているため，現場の観察を主体とする課題の場合には実感がとらえ難い，などの問題点がある。

第三国研修とは

そこで集団研修における上記問題点を解決しようという試みで始められたのがこの第三国研修である。むろん予算は日本からで，実行機関は上記集団研修と同じく JICA である。

第三国研修は，開発途上国 H = host country が他の開発途上国 R = recipient country から研修員を受け入れる場合に，先進国 D = donor country が必要な経費を負担するシステムであり，一種の経費分担方式である(図)。また開発途上国の中にはある程度の経験・技術・知識の蓄積がある国も多く，この知識等を同じような国相互に交換・共有し，共通の問題を集団的に解決することも重要である（開発途上国間技術協力-TCDC)。しかしながら，経験もある程度あり，適切な研修施設があるにもかかわらず，予算の手当が困難なため経験・施設が十分に生かされていない場合も多く，このような場合に第三国研修を導入することは，開発途上国間技術協力を促進する強力な触媒的役割を果たしうるであろう。

さらに第三国研修の意義については以下のようなものが考えられる。

1) 技術移転について：先進諸国の高度な技術は，そのまま開発途上国に適用すると消化不良を起こし易く，若干の無理があるケースがでてくる。この点第三国研修のもとでは，他の開発途上国にふさわしい形に改善された適正技術（appropriate technology）を移転するため，研修員に受け入れられ易く，参加国のニーズにあった研修が可能となる。

2) 生活環境について：技術習得に当たっては，落ち着いた生活環境は不可欠な要素である。先進国で研修を行う場合はいわゆるカルチュアショックに陥ることもままあるが，この制度の下では気候，社会・文化または言語・宗教の似通った国で研修が行われるため，このような障害は少なくなる。

3) 予算について：研修員は実施国の域内で選ばれるため，また先進国に較べて物価が安いため，同じ財源でより多くの人々に研修の機会を与えることができ，限られた財源の有効活用が可能となる。

日本の第三国研修の実施状況

日本の第三国研修は，昭和50年3月にタイのコラート養蚕研修訓練センターをベースに始められた。以来第三国研修の有効性が内外において広く認められ，着実な発展を続けている。特に近年における日本の第三国研修実施件数の伸びは

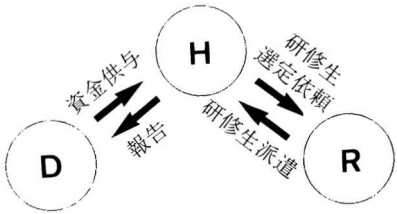

図-1 第三国研修の仕組み

めざましく，60年度においては15の実施国との協力の下に合計23件の集団研修コースが行われ，438名の研修員（周辺国307名，実施国131名）を受け入れている。林業では今回のタイの第三国研修の他に，コスタリカのCATIEへの講師派遣の2件があり，いずれも61年度開始のものである。

日本の第三国研修は次のような内容・方針で実施されている。

(1) 実施国のイニシアティブを重視し，カリキュラムの編成からコース参加者の募集に至るまでの大部分の業務の計画・実施を実施国の責任において実施する。

(2) 必要に応じて講師の派遣や資材の供与を行うが，日本側の援助は補完的なものにとどめる。すなわち講師は実施国を中心に選定。

(3) 経費は実施側も可能な範囲で負担する。

(4) 研修施設は技術協力が行われ技術移転がほぼ完了しているものが選ばれることが多い。

タイでの第三国研修・コミュニティーフォレストリーの実施状況

それでは今回のタイでの第三国研修の実施状況について若干の説明を加えてみよう。

1) 課題選定理由

上述したように第三国研修の意義については十分御理解されたことと思うが，第一回目ということもあり，一番大きな問題となったのは課題選定であった。

ご承知のようにアセアン諸国においては，焼畑移動耕作などによって急速に森林が破壊され，森林資源の保続および国土保全上，草地化した森林跡地に造林していくことが急務になっている。一方，これらの諸国はこのような地域の造林に適した方法，たとえばアグロフォレストリーの一形式，タウンヤシステムを昔から開発しており，知識の蓄積も多い。さらにこれらの諸国はこの技術を使った新しい村造りを進めることによって，森林の破壊に歯止めをかけるべく，破壊跡地の造林を促進しようとしている。しかしながら，個別的な技術はあるものの，これらの技術の総合化の方法などについてはいま少し検討する必要がある。またこのような問題を解決するには国相互の補完的技術情報の交換が大変重要な働きをするが，予算的な問題のため困難である場合が多々見受けられる。したがって，この動きを促進するための起爆剤として，日本の予算を使った第三国研修によって，アグロフォレストリーや燃材林造成，果樹園など農用林造成を組み込んだ複合技術としてのコミュニティーフォレストリーを研修することは大変大きな意味がある。

本研修では，森林破壊の主原因の一つである移動耕作者を定着させる優れた方法であるフォレストビレッジを中心とした事例研究を通じて自然的・社会的多様性の下でコミュニティーフォレストリーを成功させる手法を追求することを最終目標に置いている。なお今回の研修は，後述するような経緯で始められたもので，まず様子を見ることが目的であったため，61年度の単年度予算である。

2) 研修実施国・期間・参加者

研修実施国としては森林破壊に対する危機意識があるうえ，経験・技術・知識の豊

富な国で，しかも研修を行うにふさわしい研修施設をもつタイが選ばれた。開催担当機関は，前述したようにタイ王室林野局国有林管理部で，受け入れは技術経済協力局（DTEC）が当たった。研修期間については，日本での研修実績を配慮して，約1か月としている。また研修時期は，現地旅行を行うに都合の良い乾期である11月～12月になった。研修員の数は，研修効率を上げるためには絞り込む必要があることと，参加国をできるだけ増やしたいという相反する条件を勘案して15名とし，研修成果の今後の普及を配慮して40才以下とした。なお参加国は，この研修の発端が1985年7月に開催されたASEAN拡大外相会議でのASEAN・太平洋人造り協力・緊急行動計画であったため，表にあげた諸国に限定されている。

3） 研修プログラム

研修プログラムは，講義・見学・研修と報告書作成の3つに大別される。まずはじめの一週間はタイの専門家によるコミュニティーフォレストリーに関する講義で，項目は次のようなものである。① 農村社会について，② 村落共同体を発展させるには，③ 農村共同体における林業，④ アグロフォレストリーの概念と様式，⑤ 高地および低地におけるアグロフォレストリー，⑥ 非木材生産物，⑦ 燃材林造成，⑧ 木炭生産と小規模木材利用工業，⑨ 普及と訓練，さらに⑩ 情報交換メディアとその利用である。講師は何れもカセサート大学教授やその道の専門家であり，すべてタイ人である。筆者は日程の関係で講義を受けることはできなかったが，参加者に聞くとちょっと退屈した部分もあったらしい。

次いで講義の内容を検証する目的で2週間の現地見学を行った。見学の主題は，① 燃材林造成，② フォレストビレッジ，③ 山岳少数部族定着プロジェクト，④ 水・

表-1 参加国と参加者の職業

国　　名	職　　業	年　齢
INDONESIA	Forest Research Officer	37
	Forest Utilization Supervisor	40
MALAYSIA	State Silviculture Officer	27
	Forest Management Officer	28
PHILIPPINES	Senior Science Research Officer	36
	欠　員	
THAILAND	Technical Forest Officer	33
	Technical Forest Officer	28
	Technical Forest Officer	37
PAPUA NEW GUINEA	2名欠員	
FIJI	Assistant Conservator	37
SOLOMON ISLAND	Principal Forest Officer	39
TONGA	Assistant Lecturer	36
WESTERN SAMOA	Community Forest Officer	49

土・木総合プロジェクト，⑤木炭等小規模木材工業，さらに⑥苗木育成状況である。なお①と②が見学の中心課題であった。

①については南タイ2箇所，中部タイ1箇所および東北タイ2箇所を見学したが，タイ南部の一件を除きユーカリを主体とした早生樹の燃材林であった。見学の場所は竹田氏が見学した場所とほぼ同じであったので，詳細は竹田氏の報告を参照されたい。

フォレストビレッジについては，北部タイのチークを主体としたもの2箇所，東北タイのユーカリを中心とした外来の早生樹と一部センダンやフタバガキ，*Pterocarpus* 等国内産有用樹を交えた造林を行っているもの2箇所を見学した。これが本コースの主題の移動耕作者定着方法の目玉となったものである。

最後の一週間は，日本人専門家による特別講義，苗畑実習および研修報告書の作成に当てられた。なおこの一週間は JICA 予算によるサケラートの研修施設を使って行われている。

以上で研修の主題は終了したが，この後でバンコックに移り，反省会と閉講式を終えて，各人帰途についた。

タイのフォレストビレッジ

フォレストビレッジという名前が始めての人も多いと思うので少し説明を加えてみよう。タイのフォレストビレッジの歴史は古く，1964年に構想が発表され，1968年に林業公社（FIO）を実行母体として，不法耕作者を定着させるために開始され，現在 RFD も参加している。なおこの不法耕作者は農村や都市の生活困窮者がほとんどで，昔から焼畑を行ってきたものは大変少ない。

タイのフォレストビレッジは100家族を単位として移動耕作者を集め村を作る。一家族 0.16 ha の住居地域と 0.8 ha の農地が与えられるとともに教育等多くの便宜が与えられる。ほかに村には共有の燃材林用地数 ha が与えられる。村民はタウンヤシステム方式で森林を造成しつつ農作物を得る。なおアグロフォレストリー用地として年間一家族 1.6 ha の用地が割り当てられ，1.6 ha の造林と植栽木管理に 2,000 バーツの労賃を得る。したがって，フォレストビレッジでは年間 160 ha の造林が行われることになり，一つのビレッジを形成するには植栽木のローテーションに合った面積が必要である。ローテーションとして設定されている年数は，チークで60年，非チークで30年，早生樹で15年である。

1985年現在この方式で成功をおさめているものがかなり出てきている。成功・不成功の鍵は立地条件であるといわれている。

第三国研修の評価と今後の方向

1）今回の研修についての一般的評価

今回の研修の前評判は，参加者名簿を見て理解できるように，大変高く，特に太平洋地域からは山林局長とか次長，王族（Western Samoa）というような政策決定者が参加してきた。ただ政変直後のフィリピンと土地所有形態が複雑なパプアニューギ

ニアからは，参加予定者数を満たすことはできなかった。

研修実施国としてタイを選んだ事は前述の事情により適切であると考えられ，この評価は研修生の一致した意見であった。ただこの種の研修に不慣れなためか，運営に若干問題があった。しかし，この問題もたいして大きなものとはいえず，大成功といえる。

研修項目としてコミュニティーフォレストリーを選定したことについては，FAOも重点を置きつつあり，またニュージーランド政府もタイで対応を進めているように（本誌10月号の竹田氏が参加した研修）時宜を得た課題と考えられる。ただ今回はコミュニティーフォレストリーの一般概念を習得したにすぎず，この課題を技術化できる段階にまで高めるには，たとえば小規模木材工業の実際，農・林複合経営，造林技術の改良，普及技術の習得等，より細分化された個別技術の習得を図る必要があるとする意見が多かった。

研修時期は終了日が12月25日までの約1か月であったが，過半を占めたキリスト教徒からはこの日程に対して不満が述べられた。また乾期の最中であったため，アグロフォレストリーの間作や実際の造林について見学できなかったことに若干の不満があった。さらに1か月という研修期間は適切と考えられる。

カリキュラムについては，一般的講義と見学に割かれる時間が長く，参加者にとって研修効果がでやすい実習の時間はほとんどなかった。それについては研修生から実地訓練の時間をもっと増やして欲しいとする意見が大勢を占めた。一般的講義についてももうすこし具体的なものが欲しいという意見もあった。確かに実習の方が研修生にとって将来役立つ可能性は高いと考えられる。また見学についても成功している例の紹介が多く，タイ政府としては組み込み難いとは思うが，批判を恐れず失敗例をもっと多く見せた方が研修の実を上げることができる可能性は高い。

2）　第三国研修の今後の方向

今回の第三国研修は，大変良い成績を上げることができたが，これはタイ政府の対応の良さに加えて，始めに述べた第三国研修の意義が実に見事に理解されたことによることと，課題が適切であったことによるものと考えられる。したがって，このような形態の研修は，今回のように単年度に限定することなく，日本国内の研修に加えて今後重点的に取り組んでゆくべきものと判断される。ただこの研修は始まったばかりであるので，後少し同じ課題で継続し，今後の方向を見定めて行くことが得策であろうと考えられる。

今後も同一課題で研修を進めていくとすれば，上記したような参加者の意見を配慮し，改良を加える必要はあろう。そこで一つの案として次のような実施方向が考えられる。

(1)　主題・対応国は今回と同じとする。タイ政府も今回の参加者の意見を配慮し，対応方法の改良を図ることが望ましい。

(2)　参加国には移動焼畑耕作に苦慮している，ビルマ，ネパール，スリランカおよびパキスタンを加える。したがって，参加人員は20名程度とする。

(3) 中心課題に，より具体的な副課題をつける。副課題の候補として，木炭生産・木工等小規模家内工業，きのこ・薬草等高価値作物の生産技術，省力的・効率的造林・耕作技術，アグロフォレストリーの実際，技術・考え方の普及方法，等が考えられる。

(4) カリキュラムを，副課題にそくした講義25%，実習を含む地域研究55%およびプロジェクトの見学20%とし，レポートの作成，討論はそのつど行う。

(5) 実施時期は副課題を配慮し，植物をあつかう場合は雨期にまたがるようにする。実施期間は現状通りとする。

おわりに

第三国研修に参加し，日本国内で行われている研修，特に集団研修を外国から眺める機会が得られたことは，大変有益であった。日本国内の研修を考えてみると，研修の中には外国で行った方が利点が多いものもあるように思える。林業試験場，育種場など受け入れ機関で研修の時間配分に苦慮している現状を見ると，ますますその感を深めている。そこで一つの考え方として，熱帯という場所で行った方が適切であると考えられる今回のような課題で行う研修については，積極的にこの方式を使うことを提案したい。しかし，日本のすぐれた技術を習得するような研修については従来通りの方式で行う必要はあろう。これらの点については読者のお考えをぜひ伺いたいものである。いずれにせよ JICA 研修は，研修生の母国の技術・知識をいかに上げるかということが基本となることは理の当然であり，もし見直しをするにしてもこの基本線は堅持すべきであると考えられる。

新刊紹介

◎東南アジアの熱帯多雨林（RUBELI, K.: Tropical Rain Forest in Southeast Asia-A Pictorial Journey-Tropical Press, Sdn. Bhd., Kuala Lumpur, pp. 234, 1986 55 M$ 邦価 約3,500円）

森に入る・石灰岩台地と洞穴・山岳林・多雨林に暮す人々の4つの章に分けられているが，主に半島マレーシア，南タイ，東マレーシア（サバ），北スマトラの国立公園で撮した熱帯多雨林の景観，とくにその中の奇妙な，またカラフルな樹木・草本，キノコ，地衣，そしてけものや昆虫などの写真集。一枚一枚の写真のできばえは，すばらしいカラー印刷になれた私たちには，もう一つの感じである。著者はオーストラリア人で，1974年以来 MARA Institute of Technology で講師をし，1980年以降はフリーランサーとして写真撮影と執筆活動をつづけているとのことだが，長年の滞在中に，さすがにいいシャッターチャンスにめぐまれている。トリトリグモの子どもが巣から広がるところなど，一見に値する。みて楽しめる著書である。

（渡辺弘之）